雪雨の中で

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪雨の中で

【Ｎコード】
Ｎ５０２４Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
丈瑠と優子、隆博と敦子の二組のカップルがそれぞれ喧嘩に突入。けれど何とか和解の道を探して雨の中でそれぞれ。小山田いく先生の昔の作品『すくらっぷブック』の短編からヒントを得た作品です。

第一章

雪雨の中で

冬のある日。山口丈瑠は付き合っている伊藤優子と口喧嘩になってしまった。

「だからそれ違うじゃない」

優子は一直線の眉にカマボコ形の目をした日に焼けた女の子だ。黒く長い髪をポニーテールにしている。格好は今の女の子にしてはやや地味で小柄だがテニスで鍛えたしっかりとした身体つきをしている。口も大きくその目と共に彼女の顔をしっかりとしたものに見せている。鼻も適度な高さでありいい顔である。

その彼女が今丈瑠を見上げて。怒っているのであった。

「全然。駄目駄目よ」

「駄目駄目って何だよ」

丈瑠はそのラテン系をいささか思わせる顔で優子に返した。眉は少し薄く髪を僅かに茶色を入れて長めにしている。あまり収まりがいいとは言えない髪だ。目が大きくはっきりとしている。それが眉が薄いにも関わらずその顔をラテンを思わせるものにしている。その顔で優子を少し見下ろして言うのだった。

「一体何が駄目なんだよ」

「だから言ってるでしょ」

優子はさらに彼に言うのだった。

「何でそこでプールに行くって言うのよ」

「だって俺水泳部だから」

だからだというのである。

「プールに行くのは当然じゃないか」

「駄目よ、テニスよ」

しかし優子はこう言って聞かない。二人は教室の後ろで意固地になった顔で言い合いを続けている。二人は同じ高校の同じ学年でし

かも同じクラスなのである。
「テニスに行くのよ、その日は」
「もう冬なのに外でテニスって？」
「じゃあ冬なのに泳ぐの？」
「室内の温水プールだからいいじゃないか」
丈瑠の弁である。
「それは別に」
「寒いわよ。だからテニスよ」
「外で足だしてテニスなんかできないよ、冬に」
「動いていたらすぐに熱くなるわよ」
優子はこう返して聞かない。
「すぐにね」
「駄目だよ。それまでが寒くて」
「水泳はもっと身体が冷えるじゃないの」
「冷えないよ。ずっと泳ぐから」
「いいえ、冷えるわ」
優子はあくまで丈瑠に反発する。
「だからテニスよ」
「外でテニスの方が冷えるじゃないか」
「冷えないのよっ」
あくまでこう言い合って譲らない。そのまま喧嘩になってしまった。しかも今クラスで喧嘩をしているカップルは彼等だけではなかった。
「あの二人は派手だけれど」
「向こうの二人は」
「完全に冷戦かあ」
隣同士になっている席で顔を背け合っているのは菅生隆博と神埼敦子である。隆博は背が高く多少エラが張った顔の形をしており眉はしっかりとしていて黒い。眼鏡をしており髪型は何となく真面目に刈っている。外見を見れば非常に大人しそうなものである。

敦子は黒い髪をショートにしており年齢に比べて幼そうな顔をしている。口は少し大きくはぱっちりとしている。その二人が顔を背け合っているのである。
「あの二人の喧嘩の原因って何だったっけ」
「何か菅生の奴があれだってさ」
「浮気でもしたとか？」
「違うよ。志賀直哉読んでいてさ」
高校生が読む作家としてはオーソドックスであると言っていい。
「それを神崎の奴が見て怒ったんだって」
「何で志賀直哉読んでいて怒るのよ」
「神崎太宰好きだかららしいな」
だからだというのである。
「太宰が志賀直哉を嫌っていたってことでな」
「何か下らない理由ね」
「向こうの二人と同じで」
ここで皆相変わらず言い争いを続けている丈瑠と優子を見る。二人の喧嘩は熱戦である。
「どっちにしろ。クラスの中でカップルが二つも喧嘩してると」
「厄介だよなあ」
「全く」
皆はあ、と溜息をつくのだった。とにかく喧嘩が終わらない。彼等はその日はずっと喧嘩のままでお互い熱戦と冷戦を繰り広げていた。

第二章

その次の日。学校に来た丈瑠はすぐに優子と顔を合わせた。するとまた言い争いになった。

「だから何度も言うわよ」

「こっちも何度でも言うぞ」

お互いに掴みかからんばかりである。

「テニスよ、絶対にね」

「水泳に決まってるだろ」

「どっちでもいいよ」

「五月蝿いから少しは黙りなさいよ」

皆その二人を見てうんざりとした顔になる。とはいっても隆博と敦子の間に入ることもできず非常に困った状況の中にいた。

「あっちもねえ」

「何かあのまま？」

「何時まで続くのかしら」

相変わらず冷戦を続け顔を背け合っている。こちらもこちらで喧嘩しっぱなしである。この熱戦と冷戦は昼まで続いた。何と丈瑠と優子は授業中は言い争いこそしなくとも激しく睨み合っていたのである。クラスメイトはおろか先生達もこれにはうんざりだった。

「ま、まあ若いうちは色々あるからな」

こう言ってそれを見ないことにしているのだった。

「気にしないでな」

先生達もスルーし喧嘩を放置する。というよりは触れられなかった。そして昼になると丈瑠は昼食を買いに行った。その際やはり優子と少し喧嘩になった。

だが今度はクラスの男連中が丈瑠を、女連中が優子を連れて行った。流石に昼休みまで喧嘩をされてはたまったものではないからだ。

「パンでも買いに行くか」

「それでいいよな」
「お弁当あっちで食べましょう」
「たまには屋上でね」
こうして二人を引き離すのだった。丈瑠はとりあえず売店でパンを買った。それを手に皆と別れそのうえで校庭のベンチに座ってパンを食べようとする。するとそこに。
「あれっ」
「あっ」
そこに来たのは敦子だった。彼女の手にはお握りがある。それとお茶の組み合わせだ。
「何だ、神崎か」
「山口君じゃない」
お互いの名前を言い合う。そのうえで二人共その目をぱちくりとさせた。
「ここで食べるつもりか？」
「ええ。そうだけれど」
「菅生は・・・・・・ってそうか」
「優子ちゃんとはだったわね」
お互いの喧嘩のことはわかっていた。そのことも話すことになった。
「今は二人じゃとてもな」
「今日も凄くやり合ってたわよね」
「参ったよ」
丈瑠は困った顔で敦子に告げた。
「本当にな」
「とりあえず座っていいかしら」
ここで敦子は彼に問うのだった。
「ベンチに」
「ああ、いいよ」
丈瑠は気軽に彼女の申し出に答えた。

「それじゃあ食べるか」
「ええ。そうしましょう」
敦子は間こそ置いたが丈瑠の横に座った。そうしてそのうえでお握りやお茶を食べながらそのうえで彼と話をはじめるのだった。
「私ね。今隆博君と喧嘩してるけれど」
「ああ」
「本当はもう仲直りしたいのよね」
こう言うのである。
「喧嘩って元々好きじゃないし」
「俺もだよ」
そしてそれは丈瑠も同じなのだった。
「俺も疲れるし。気持ちよくデートしたいんだけれどな」
「優子ちゃんもデート自体はしたいみたいね」
「それはわかってるんだよ」
言わずともだった。そうでなければ昨日からずっとそのデートを巡って喧嘩をする筈もない。結局はそういうことなのだった。お互いそれをしたいのだ。

第三章

「本当にな」
「仲直りしたいの？」
「そうだよ」
彼もまた本音を言った。
「実際のところはさ」
「そうよね。どうにかならないかしら」
「俺がアドバイスするにはさ」
丈瑠の方から言ってきた。
「一度菅生と話した方がいいな」
「隆博君と？」
「そうだよ。今顔を背け合ってるよな」
「うん」
「だったら向かい合ってさ。しっかりとさ」
「それがいいのね」
敦子は彼の言葉を聞いて少し考える顔になった。
「話し合うのね」
「ああ、そうしたらどうだよ」
「そうね」
丈瑠のアドバイスにさらに考える顔になる。そうしてその顔で言うのだった。
「それじゃあ」
「話し合ってみるのか？」
「そうしてみるわ」
小さくこくりと頷いて答えた。
「やっぱりね。一度じっくりと」
「太宰が好きで志賀直哉も好きな人も多いしな」
「考えてみればあれよね」

敦子も言うのだった。
「どうでもいいことよね、そんなの」
「限りなくな。そうだよな」
言っているうちにだった。丈瑠もまた気付いたのだった。
「俺の方もそうだよな」
「山口君の方も？」
「考えてみるとそうなんだよな」
首を捻りながら言うのだった。
「やっぱり」
「仲直りするってこと？」
「考えてみればテニスとか水泳とか些細なことなんだよな」
そのことに気付いたのである。
「本当にさ。そんなことは」
「じゃあやっぱり仲直りするの？」
「そうするのが一番だよな」
結論としてはそうなのだった。それしかなかった。
「やっぱりな」
「そうよね。喧嘩したままなんて」
「とりあえずあいつと話すか」
パンを食べながら言うのだった。クリームパンの中のクリームを味わいながら。
「そうするか」
「私も菅生君と話してみるわ」
「ああ、それじゃあな」
「ええ」
こうして二人共仲直りの為にそれぞれの相手と話すことにした。
その時優子は相変わらず火山の噴火口の様に怒っていた。そうしながら学校の廊下を進んでいるとだった。
前から来た隆博にまともにぶつかった。ぶつかってから言う言葉は。

「気をつけなさいよ！」
「ってぶつかっておいてそれはないだろ？」
ぶつけられた隆博はすぐにその優子に抗議した。
「そっちが見ていなかったんじゃないか」
「五月蝿いわね」
しかしそれを聞くことは今の優子には到底できないことだった。
「あんたもぼーーーってしてたんじゃない」
「それはそうだけれど」
「わかったら文句言わないの」
八重歯を牙の様にして抗議を続ける。
「いいわね」
「ちぇっ、わかったよ」
「ちぇっ、はいいのよ。それはそうとしてよ」
「うん」
「あんた何処に行くのよ」
こう隆博に問うのだった。
「一体何処に行くのよ、これから」
「いや、お昼食べにさ」
「ああ、そういえばそうね」
隆博の言葉を聞いてそのお昼のことを思い出した優子だった。

第四章

「お昼だったわね。そういえば」
「伊藤さんはもう御飯食べたの？」
「まだよ」
　憮然とした顔で言葉を返す優子だった。
「今そのこと思い出したのよ」
「お昼食べるの忘れる位怒るなんて」
　そんな優子に対していささか呆れてしまった隆博だった。
「ちょっと怒り過ぎじゃないの？」
「ほっといてよ。とにかくお昼よね」
「これから食堂に行くんだけれど」
「わかったわ。行くわよ」
　半分命令だった。
「いいわね」
「言われなくても行くけれど」
　それはもう決めている隆博だった。元からそのつもりで今向かっているからだ。
「それはね」
「行くわよ」
　こうして二人は食堂で話すのだった。二人は食堂の席で向かい合いながら話をしている。優子はラーメンに炒飯、隆博はたぬきそばに天丼という組み合わせである。
「ラーメンに炒飯なんだ」
「この組み合わせが最高でしょ」
「まあね」
　この組み合わせについては反対しない隆博だった。
「いいと思うよ」
「あんたもいい組み合わせじゃない」

優子もまた隆博の食べている組み合わせを見て話すのだった。
「お蕎麦と丼って。王道じゃない」
「まあね」
自分の食べ物についても頷く隆博だった。頷きながらその蕎麦をすする。腰があり風味もしっかりとしている。中々美味い蕎麦である。
「いつもこうして御飯と何かを食べてるんだ」
「つまりおかずってわけね」
「うん」
また優子の言葉に頷く。
「そういうこと。このお蕎麦はおかずなんだ」
「私も同じよ。ラーメンはおかずよ」
それは優子も同じだった。
「何かね。それってね」
「それって？」
「あいつも同じなのよ」
ここで口を尖らせた優子だった。
「あいつもね」
「あいつ？ああ」
隆博は今の言葉からすぐにわかった。
「山口のことだね」
「あいつもね。絶対に御飯があったらおかず頼むのよね」
「麺類とかお魚とかだよね」
「コロッケが好きね」
それが好きだというのである。
「私は白身魚のフライが一番好きだけれど」
「中身は違うけれど外見は殆ど変わらないんじゃないの？それって」
「全然違うわよ」
またその八重歯を牙の様にして言う優子だった、
「コロッケとフライじゃ」

「じゃあコロッケ嫌いなの？」
「嫌いとは一言も言ってないわ」
それは否定するのだった。
「むしろ大好きよ」
「そうなの」
「水泳だって好きなのよ」
何故かここで水泳の話をするのだった。
「けれどね。冬に水泳ってある？」
「あるんじゃないかな」
「ないわよ。全くあいつはそれが全然わかってないのよ」
かりかりとした顔でラーメンのもやしを噛みながら言うのだった。
「全然ね。わかってないわ」
「わかってないって」
「そうよ。あいつのそういうところがわからないのよ」
「それじゃあ何か別のしたら？」
隆博はその優子に対して提案したのだった。

第五章

「その水泳とテニス以外にさ」
「水泳とテニス以外って」
「他にもすることあるじゃない」
彼の提案はこれだった。
「だからさ。それに行ったら」
「そうね」
言われてそれも一理あると思いはじめた優子だった。
「それじゃあ何か考えてみようかしら」
「いいと思うよ。それで」
「わかったわ。それじゃああんたもそうしなさいよ」
「俺も？」
「そうよ。あんたもよ」
今度は炒飯をれんげでかきこみながらの言葉だった。
「あんたもそうしなさいよ」
「俺がそうするってことは」
「さっさと敦子と仲直りしなさいよ」
優子が言うのはこのことだった。
「わかったわね。仲直りしなさい」
「仲直りって」
「太宰が何よ。志賀直哉が何よ」
そしてこうも言ってみせるのだった。
「そんなの大した違いじゃないわよ」
「いや、それは」
全然違うと言おうとした。だがここで優子は言い切ったのだった。
「プランクトンよりもね」
「プランクトンよりもって」
「そうでしょ？いい本だったら読む」

優子は見事に言い切った。
「駄目な本だったら読まない。それだけじゃない」
「それだけなんだ」
「そうよ、それだけよ」
ラーメンをすすりながら言い切るのだった。
「本当にね。それだけじゃない」
「そういえばそうかな」
「そうよ。わかったら早いところ敦子のところに行きなさいよ」
優子はまさに思い立ったが、の人間だった。
「今からでもね」
「今からはちょっと」
「じゃあすぐに行きなさい」
今からでなければすぐに、であった。やはり性急な優子である。
「わかったわね。すぐによ」
「わかったよ。それじゃあ」
頷こうとした隆博だったがここで。ふと制服に入れている携帯に着信音が鳴るのだった。
「あっ、メールが来た」
「あんた一体何やったのよ」
「別に何もやってないよ」
身に覚えのないことなのでこう返した。
「別にね」
「そう。じゃあ何かしら」
「そこまではわからないけれど」
言葉を返しながら携帯を取り出す。するとそのメールの主は。
「敦子ちゃんからだ」
「丁度いいじゃない」
優子は今の隆博の言葉を聞いて述べた。
「それで何て書いてあるの？」
「今日の放課後商店街の入り口って会いたいって」

「商店街の入り口って駅前の」
「うん、そこって書いてあるよ」
それまで書いてあるのだった。
「そこの入り口でね」
「ふうん。敦子の方も同じこと思ってたのね」
優子はすぐにそのことを察したのだった。
「仲直りしたいって」
「そうだったんだ」
「そうよ。わかったら行きなさいよ」
優子は無理にでも彼をそこに行かせるつもりだった。彼女にしろクラスメイトとして敦子の為にも彼にはそこに絶対に行って仲直りしてもらいたかったのである。
「いいわね」
「うん」
「大体ね。喧嘩ばかりしても」
さらに言おうとしたが今度は自分の携帯が鳴った。それに出ると彼女に届いたメールの主は。
「あっ」
「誰から？」
「あいつからよ」
憮然とした顔で隆博に答えた。

第六章

「丈瑠の奴、一体何なのよ」
「ああ、山口君ね」
「そうよ。何だっていうのよ」
ぶつぶつと言いながらその携帯のメールを見る。そこに書いてあったことは。
「ふうん、話ねえ」
「ああ、山口君も話がしたいんだ」
「時間は放課後ね」
時間は同じだった。
「それに場所は商店街の入り口ね」
「あれっ、それも同じなんだ」
「何考えてるのかしら」
優子はメールを見終わってから憮然とした顔になった。
「全く。同じ時間に同じ場所って」
「偶然かな」
「どうせ二人共たまたま会って相談してそこにしたんでしょ」
優子はここでも鋭かった。
「そうに決まってるわ」
「そうかな」
「そうよ、絶対にね」
自分のその直感には絶対の自信がある優子だった。確かに鋭いのは事実だ。
「ふうん、けれどいいわ」
「いいんだ」
「望むところよ」
何故か半分喧嘩をするような調子であった。
「こっちもね」

「望むところって」
「さて、何を言ってくるのかしら」
不敵な笑みを浮かべながら携帯をなおした。それから今度は炒飯を食べるのだった。
「期待しているから」
「期待ねえ」
「変なこと言ったらそれこそ」
その炒飯を食べながら自分の左手を拳にして言うのだった。
「容赦しないからね」
「容赦って」
「叩き潰してやるわ」
不敵な笑みのままの言葉は続く。
「その時はね」
「ふうん、伊藤さんも同じなんだ」
隆博はそんな彼女を見て言う。
「仲直りしたいんだね、やっぱり」
「馬鹿言わないでよ」
口ではそれを否定する優子だった。
「私はね、そもそもね」
「わかったよ。まあとにかく放課後ね」
「ええ、行くわよ」
行かないという選択肢は最初からなかった。
「例え雨になってもね」
「雨ねえ」
今の優子の言葉にふと暗い顔になる隆博だった。
「そういえば今日は午後から」
「天気が悪くなるの？」
「雨らしいよ」
このことを彼女に話すのだった。
「どうやらね」

「嫌ね。雨なの」
雨と聞いて如何にも嫌そうな顔になる優子だった。
「何が嫌ってそれが一番嫌なんだけれど」
「仕方ないじゃない。天気はどうしようもないよ」
「そうよね。まあいいわ」
それはもういいとするのだった。さしもの優子も諦めるしかなかった。
「その時は傘を持ってね」
「行こうか」
「ええ」
優子達も仲直りをしたいと思っていた。そうしてその放課後。それぞれその商店街の入り口に向かうのであった。
「雨ね」
「全く。天気予報の通りになるなんてな」
敦子と丈瑠は二人一緒に商店街の入り口に向かっていた。雨の中傘をさしてそうして歩いている。
「折角なのにな」
「まあ仕方ないわね」
敦子は少し溜息をついて丈瑠に答えた。
「雨はどうしても降るものだし」
「冬の雨か」
また言う丈瑠だった。
「まあ雨が降らない季節っていうのもないし」
「そうよね。とにかく商店街の入り口まで行ってね」
「そこであいつと話しろよ」
「ええ」
その言葉にこくりと頷いて答える敦子だった。
「わかってるわ」
「俺もな」
そしてそれは彼も同じなのだった。

「それは」
「けれど菅生君」
敦子は俯き加減で彼の名前を呟いた。

第七章

「来てくれるかしら」
「来るさ」
丈瑠はその彼女にこう言葉を返した。
「絶対にな」
「絶対に？」
「ああ、絶対に来る」
断言さえしてみせるのだった。
「あいつは絶対に来るさ」
「そう。来るの」
「あいつもそう思っているからな」
だからだというのである。
「仲直りしていってな」
「そう。だったら」
「志賀直哉でもいいよな」
今度はその喧嘩の元について尋ねた。
「それでもな」
「ええ、もういいわ」
丈瑠のその問いにこくりと頷いて答えた。
「そんなの。小さなことだってわかったし」
「俺もだな」
その考えに至ったのは彼も同じなのだった。
「そんなことはな。本当にな」
「小さいことなのね」
「ああ、何でもないことだった」
わかったからこそ言える言葉だった。
「だから今こうして行くんだ」
「そうね。わかっているからこそ」

「行くか」
また敦子に告げた。
「あいつに会いにな」
「ええ」
まだ俯き加減で不安げな顔ではあったがそれでもこくりと頷いた。
二人はそのままその商店街の入り口に向かっていくのであった。
その頃優子と隆博もまた。二人並んでそれぞれ傘をさしながら商店街の入り口に向かっていた。優子が隆博に対して言う。
「それでね」
「うん」
「ちゃんと謝りなさいよ」
こう彼に言うのだった。
「いいわね」
「謝るんだ」
「男がまず謝るのよ」
完全に言い切った言葉だった。
「こういう時はね」
「そういうものなんだ」
「そうよ。相手を立てないでどうするのよ」
正面を見たまま隆博に告げていた。
「それをしないで。そうでしょ？」
「そうだね。言われてみれば確かに」
「わかったらやりなさい」
その隆博の背中を叩くような言葉だった。
「言葉より行動よ」
「わかったよ。それじゃあ」
「私もね」
隆博に対して言い終えると自分のことも言うのだった。
「腹括って行くんだし」
「腹括ってって」

「当たり前でしょ。あいつと会うんだから」
「山口と」
「さて、どう来るのかしら」
正面を向いたままのその目は強い光を発していた。
「こっちもいきなりやってあげるからね」
「いきなりって」
「こっちの話よ」
それは隆博には言わなかった。
「いいわね。何はともあれ行くわよ」
「うん」
とにかく行かないと話にならなかった。こうして二人も商店街の入り口に向かった。そうしてそこで四人同時にばったりとそこに着いたのだった。
「御免」
「御免なさい」
まずお互いに頭を下げた。何と四人同時にだった。

第八章

「えっ！？」
「今何て」
丈瑠も優子も今のお互いの行動に唖然となった。隆博と敦子はそうではなかったが。
「謝った！？」
「嘘でしょ」
驚く二人の横では。もう隆博と敦子が仲直りしていた。
「太宰でも志賀でもいいよね」
「そうね」
笑いながら話をしていた。二人共傘をさしたまま笑顔で話をしている。
「いいものはいいから」
「こだわっても何にもならないわね」
「そうだね」
隆博は今の敦子の言葉に頷いた。
「じゃあさ。僕も太宰読むし」
「私も志賀直哉読んでみるわ」
お互いが読んでみるというのである。
「走れメロスか富嶽百景か」
「和解か城の崎でも」
それぞれの代表作と言ってもいい作品である。
「お互い読んでみてね」
「いいものは皆で読みましょう」
こう話をするのだった。ところがその横では。
相変わらず丈瑠と優子が唖然とした顔になっていて。そのうえでぎこちなく話しはじめていた。
「あのさ、俺さ」

「私ね」
まるで付き合いはじめた時の様である。
「考えたんだけれどさ」
「別にいいんじゃないかしら」
こう言い合うのだった。
「テニス。行かないか」
「水泳でもね。別に」
もじもじとしながら言葉を出していく。
「そんなの大したことじゃないからな」
「別に何でも。二人なら」
「だからさ。テニス行く？」
「水泳行きましょう」
二人で顔を見合わせての言葉だった。
「優子の好きな場所にさ」
「丈瑠がやりたいことでいいわよ」
「って何か」
「こう言ってしまったら」
言い終わってから苦笑いになる二人だった。
「結局同じだよな」
「そうよね。両方がどっちでもいいって言ったら」
「じゃあ両方行くか」
「そうね」
そしてこうした結論に至った。
「そうしたらいいよな」
「ええ。両方してね」
「よし、じゃあそれでな」
「今度のデートはそれね」
二人もまた話が決まった。そのうえで仲直りすることができた。
二組のカップルはこうして完全に仲直りすることができたのであった。

そしてその時。雨が。
「あっ、雨が」
「雪に」
雪に変わったのだった。白銀の雨が白く柔らかい雪に変わったのだ。
「今年はじめての雪だな」
「初雪ね」
二人で言い合う。
「なあ」
丈瑠がここで皆に言うのだった。
「折角四人一緒にいるからな」
「どうしたの？」
「四人でデートしないか？」
こう提案するのだった。
「四人でな。どうだ？」
「そうね」
最初にその提案に賛成したのは優子だった。
「折角の初雪だしね」
「じゃあそれでいいよな」
「放課後のデートっていうのも」
優子は微笑みながら言う。
「いいものよね」
「どうする？」
「そうね」
隆博と敦子もここで二人顔を見合わせる。
「いいと思うけれど」
「雪の中っていうのもロマンチストだし」
二人は雪にそのロマンを見ていた。
「それじゃあ。僕達も」
「それでね」

「よし、じゃあいいな」
丈瑠は二人の言葉も受けた。
「そういうことでな」
「四人でデートかあ」
「雪の中で」
「私が言うと様にならないけれど」
優子は少し苦笑いを浮かべてから三人に告げてきた。
「そういうのもいいわね。ロマンチックで」
「優子がロマンチックか」
「何よ。おかしいの？」
「いや、いいさ」
丈瑠もそれをいいとするのだった。
「じゃあ。行くか」
「うん、それじゃあ」
「行きましょう」
隆博と敦子が頷いた。
「雪の中のデートに」
「四人でね」
四人は笑顔で頷きあいそのうえで歩きはじめた。雪は彼等を優しく柔らかく包み込むかの様に降り続けている。その中を静かに進んでいくのだった。

雪雨の中で　　完

２００９・８・３０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5024i/

雪雨の中で

2010年10月8日15時08分発行